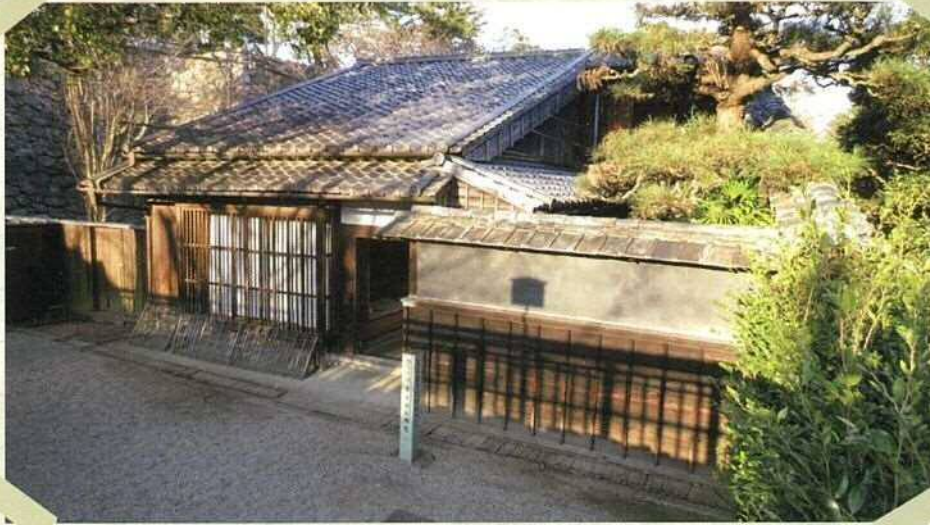


本居宣長記念館 (もとおりのりながきねんかん)



鈴屋



鈴屋遺蹟保存会正門



本居宣長記念館

本居宣長記念館は、国学者・本居宣長(もとおりのりなが)さんの自画像に出会えるほか、自筆稿本類や遺品などを見ることができます。記念館の隣には宣長さんの旧宅である「鈴屋(すずのや)」、他、「桜松閣(おうしょうかく)」、「日本庭園」などがあります。宣長さんの息吹が今にも聞こえてくるようですね。

詳細

本居宣長記念館は、国学者・本居宣長の自画像に出会えるほか、自筆稿本類や遺品などを見ることができます。公益財団法人鈴屋遺蹟保存会が運営しており、収蔵品総数は約 16,000 点にのぼるそうです。記念館では、本居宣長旧宅(国特別史跡)、魚町の本居宣長宅跡・附春庭旧宅、土蔵(国特別史跡)、山室山(やまむろやま)の本居宣長奥墓(おくつき)(国史跡)を管理しています。

ちなみに、記念館の隣にある四五百森(よいほのもり)は、町医者だった宣長が散歩をして回ったという言い伝えがありますが、四五百森は松坂城内にあるため、実際は宣長が足を踏み入れることはできない場所でした。明治の頃から言われるようになった言い伝えですが、これはおそらく町医者である宣長への親しみと尊敬が、四五百森へのそれに重なって生まれたのかもしれない。

〔鈴屋〕

元禄 4 年(1691)に宣長の祖父、小津定治が建てた家です。明治 42 年(1909)に魚町から松坂城跡に移転されました。本居宣長が 12 歳から 72 歳まで暮らした住まいです。現在、鈴屋遺蹟保存会によって保存されており、国特別史跡に指定されています。

ちなみに「鈴屋」とは、旧宅の 2 階にある書齋に付けられた呼び名です。この書齋は、宣長の名声があがりはじめた 53 歳の時、物置を改造してつくられました。その床の間近くに 36 個の鈴を連ねた「柱掛鈴(はしらかげず)」をかけたことにちなみ、「鈴屋」と名づけられました。宣長の主な著作はこの部屋で書かれたと言われています。

〔鈴屋遺蹟保存会正門〕

明治 42 年(1909)にできた門で、神社仏閣の補修を手がけていた名工が制作しました。鎌倉時代初期の奈良・東大寺の大仏様(だいぶつよう)という様式が盛り込まれている品格のある建築です。

〔桜松閣〕

桜松閣は、以前は鈴屋遺蹟保存会の事務所として用いられていました。倉庫・正門・塀とともに明治 42 年、本居宣長旧宅が松坂城隠居丸跡へ移築された際に建設された建物です。旧事務所の唐破風玄関や正門は、鎌倉時代初期の大仏様の細部意匠を基調に造られています。昭和 63 年(1988)に茶席「桜松閣」として開所されました。現在は、くつろぎ処「桜松閣」として、来訪者の休憩所に利用されています。

本居宣長記念館 〒515-0073 松阪市殿町 1536-7 TEL 0598-21-0312 **開館時間** 9:00 ~ 16:30 **休館日** 月曜日・年末年始
入館料：本居宣長記念館・旧宅(共通) / 大人 400 円 / 大学生等 300 円 / 小人(小学 4 年から高校生) 200 円
 ※団体・身障者割引有り

くつろぎ処「桜松閣」 TEL 0598-22-3331 **開処時間** 10:00 ~ 16:00 **開処日** 土曜日、日曜日、祝日

常夜灯 (じょうやとう)



常夜灯



常夜灯(右)



常夜灯(左)

松坂城跡の隠居丸石垣のした、裏門跡近くに、2基の常夜灯があります。向かって左側のものは、国学者・本居宣長（もとおりのりなが）さん存命中の安永9年（1780）につくられたもので、もともと参宮街道の櫛田川渡し場の早馬瀬町（はやませちょう）側にあったものです。宣長さんが伊勢へ往診に行くときに目にしていたかもしれませんね。

詳細

松坂城跡の隠居丸石垣のした、裏門跡近くに、2基の常夜灯があります。向かって左側のものは、国学者・本居宣長存命中の安永9年（1780）につくられたもので、もともと参宮街道の櫛田川渡し場の早馬瀬町（はやませちょう）側にあったものです。宣長が伊勢へ往診に行くときに目にしていたかもしれませんね。

宣長は、町医者として松阪と伊勢を徒歩で往復していました。現代のわたしたちには到底想像できない長い道のりですね。旅好きでもあった宣長は、歩くことによって健康を保つことができたうえ、歩きながら学問について考えていたのではないのでしょうか。ちなみに、この常夜灯は、昭和29年（1954）に現在地へ移されています。

また、向かって右側の常夜灯は、宣長が没して22年後の文政6年（1823）につくられたもので、もともと参宮街道筋の津市藤枝町にあったものです。一時期、売却されて藤枝町から分岐する香良洲道の香良洲大橋（津市香良洲町）のふもとにありましたが、昭和初期に現在地へ移されました。

本居宣長ノ宮 (もとおりのりながのみや)



本居宣長ノ宮鳥居



本居宣長ノ宮

もともとは、国学者・本居宣長(もとおりのりなが)さんが眠っている山室山(やまむろやま)の奥墓(おくつき)の隣につくられた神社です。当時は「山室山神社」という名前でした。その後、現在の市役所がある場所への遷座を経て、四五百森(よいほのもり)に落ち着きました。

詳細

明治8年(1875)、国学者・本居宣長が眠っている山室山(やまむろやま)の奥墓(おくつき)の隣につくられた神社です。祭神は宣長ですが、相殿に宣長の没後の門人といわれる平田篤胤(ひらたあつたね)を祀り、当時は「山室山神社」という名前でした。明治22年(1889)、現在の市役所がある殿町に遷座され、大正4年(1915)に四五百森へ遷されました。そして、神社名も昭和6年(1931)に「本居神社」、平成7年(1995)に現在の「本居宣長ノ宮」になりました。

現在の植松宮司は、宣長の高弟でもあった尾張国名古屋の植松有信(うえまつありのぶ)のご子孫です。有信は、はんぎ〔注〕を彫る板木師として、宣長の『古事記伝』をはじめとする多くの著書の出版に携わりました。また、宣長が亡くなった直後、山室山奥墓の仮庵(かりいお、仮設の小屋)に泊まって、1週間余り墓守りをしたことでも知られています。奥墓のすぐ下には、その時に詠んだ有信の歌碑が建てられています。

〔注〕「はんぎ(板木・版木)」とは…印刷するために文字・図画などを彫刻した木版のこと。

本居宣長歌碑 (もとおりのりながかみ)



本居宣長歌碑



石の駅鈴



七種鈴をあしらった石灯籠

昭和 34 年 (1959) に建てられた歌碑は、国学者・本居宣長 (もとおりのりなが) さんの 6 世孫にあたる本居弥生 (もとおりやよい) さんの筆によって、「しきしまの やまところを 人とはば あさひににほう 山ざくらばな」という宣長さんの最も有名な和歌が刻まれています。

詳細

昭和 34 年 (1959) に建てられた歌碑には、国学者・本居宣長の 6 世孫にあたる本居弥生の筆によって、「しきしまの やまところを 人とはば あさひににほう 山ざくらばな」という、宣長が 61 歳の自画像の上にしたための和歌が刻まれています。宣長の歌碑は、松阪市内に 12 基もありますが、この「しきしま…」の和歌は、松坂城跡隠居丸日本庭園内の鈴屋遺蹟之碑、松阪農業公園ベルファーム駐車場の駅鈴碑にも刻まれています。

桜、とりわけ山桜は、宣長が最も好んだ花であり、自宅の庭にも植え、春になるとしばしば花見に出掛けています。44 歳と 61 歳のときに描いた自画像には、桜を題にした和歌をそれぞれしたため、亡くなる 14 ケ月前に書いた「遺言書」の中には、山室山 (やまむろやま) の奥墓 (おくつき) には山桜の木を植えるように指示するとともに、自らの諡 (おくりな：死後の称号) も「秋津彦美豆桜根大人 (あきつひこみずさくらねのうし)」と称しました。ちょうどこの頃、桜を題にした和歌を 300 首も詠んで『枕の山』という歌集もまとめています。

また、和歌の中にある「やまところ」とは、偽りや飾りのない人の心、物や事に触れて揺れ動く人の心であり、これが宣長の「もののあわれ」という考え方です。朝、山桜の花が満開になって美しいと思う心は、日本人に共通する感性であって、それを素直に表現することが「もののあわれを知る」ということだと考えたのでした。

ちなみに、明治政府は明治 37 年 (1904) に煙草専売法を施行し、初めての国産紙タバコを発売しますが、そのときの銘柄は宣長のこの和歌からとって「敷島」・「大和」・「朝日」・「山桜」の 4 品目でした。

そのほか、神社境内では本居宣長記念館が開館した昭和 45 年 (1970) に寄進された石の駅鈴や、七種鈴 (ななしゅすず) をあしらった石灯籠を見ることがもできます。

松阪神社の長寿樟 (ちょうじゅくす)



長寿樟



本居宣長歌碑

樹齢 900 年ともいわれる長寿樟は、城の守護神でもあった神社のご神木です。樹齢 900 年ということは、平安時代にこの地に根を生やした樟の木です。平安貴族もこの木の下で詩を読んでいたかも知れませんね。

詳細

樹齢 900 年ともいわれる長寿樟は、蒲生氏郷 (がもううじさと) の時代には城の守護神であった八幡宮のご神木でもありました。根元にある国学者・本居宣長 (もとおりのりなが) の歌碑は、昭和 33 年 (1958) に牧戸正平氏により寄進されたもの。この歌碑には、宣長の 5 世孫にあたる本居清造 (もとおりせいぞう) の揮毫 (きごう) [注] によって、四五百森 (よいほのもり) を題にした次のような歌が刻まれています。「民の戸も ささで月見る よひのもり めぐみのかげの くもりなきよは」これは、宣長が 68 歳の時に詠んだ歌でした。同じ時に四五百森を題に詠んだ歌碑が、松阪駅東口 (近鉄側) のロータリーにもあります。

[注]「揮毫」とは…「毫 (ぶで) を揮 (ふる) う」という語源から、毛筆で何か言葉や文章を書くこと。また、著名人や書家などが依頼に応じて格言や看板の文字を書くこと。

同心町 (どうしんちょう)



同心町

同心町は、現在の殿町の中でも本殿町および上殿町地域の旧称です。ここには、紀州藩士の同心〔注1〕および鳥見〔注2〕クラスの紀州藩士60人余りの役宅が置かれていました。同心町通りには美しい生け垣が連なり、1戸当たり約200坪の広さをもつ敷地内には、現在でも江戸時代末期の建物が10数件残っています。同心町の町並みは、松阪の誇り。武家屋敷群がかもす歴史の深みある風情をご堪能くださいね。

〔注1〕同心とは…江戸幕府の役職名。諸奉行・諸司代・城代・大番頭・書院番頭などの配下に属し、与力の下にあつて庶務・警察の事をつかさどつた役人のこと。

〔注2〕鳥見とは…江戸幕府の役職名。將軍の御鷹場を管理し、密猟の禁制などにあたつた役人のこと。

詳細

現在の松阪市役所から旧長谷川邸の見事な庭園にかけての大手通りと呼ばれる一帯には、紀州藩が遠く離れた広範な勢州領（松阪領、白子領、田丸領あわせて18万石）を統治するための中枢的な役所が置かれていました。そこには、勢州奉行所、町奉行所、御船奉行所などがありました。

また、現在の殿町の交差点から松阪市立第一小学校へ向かう道を代官小路（だいかんしょうじ）と呼びました。そこには、紀州藩松阪領を統治するための役所や、城代与力、町奉行与力、城代組同心たちの屋敷が置かれていました。また、代官所、郡奉行所、与力屋敷、田丸白子会所、松阪学問所、目付屋敷などがありました。

さらに、代官小路から商業通りにいたる本殿町と上殿町の区域を江戸時代には「同心町」と呼んでいました。ここには、紀州藩士の同心および鳥見クラスの紀州藩士60人余りの役宅が置かれていました。同心町通りには美しい生け垣が連なり、1戸当たり約200坪の広さをもつ敷地内には、現在でも江戸時代末期の建物が10数件残っています。

江戸時代からほとんど姿を変えていない武家屋敷のなかに、原田二郎（はらだじろう）邸があります。原田二郎は江戸時代末期の嘉永2年（1849）に、殿町の町奉行組同心である原田清一郎の長男として生まれました。明治・大正時代に活躍した実業家で、大正9年（1923）に全財産を寄付して、財団法人原田積善会を設立しました。現在まで国家及び社会の公益事業につき奨励すべきものに助成活動を行っています。同会は殿町にある原田二郎の生家と敷地を松阪市に寄贈しました。

樹敬寺 (じゅきょうじ)



本堂



山門



本居宣長の歌碑



原田二郎の歌碑

国学者・本居宣長(もとおりのりなが)さん一族の菩提寺(ぼだいじ)です。国史跡に指定された宣長さん夫妻と長男の春庭(はるにわ)さん夫妻の墓が、背中合わせに立っています。15歳の宣長さんは、この寺で聴いた赤穂義士(あこうぎし)の講釈を一字一句暗記し、帰宅後「赤穂義士伝」を書き残しました。また29歳から、この寺の塔頭(たっちゅう)・嶺松院(れいしょういん)で開かれた月例の歌会に参加し、お弟子さんたちと四季折々の和歌を詠んだことでも知られています。

詳細

浄土宗の樹敬寺は、建久6年(1195)細頸(ほそくび、松ヶ島町の旧称)に不断念仏寺の寺号で建立され、享禄元年(1528)に再建されて樹敬寺と改称、天正16年(1588)に現在地へ移転されました。その後、享保元年(1716)、明治26年(1893)の大火で焼失し、現在の本堂は明治35年(1902)に再建されました。

樹敬寺は、国学者・本居宣長の菩提寺であり、宣長の母かつの実家・村田家の菩提寺でもあります。宣長は、15歳の時にこの寺で聴いた赤穂義士の講釈を一字一句暗記し、帰宅後「赤穂義士伝」を書き残しました。また19歳の時には、浄土宗の奥義を伝える「五重相伝(ごじゅうそうでん)」を受けています。

本居家は代々熱心な浄土宗信者で、宣長が亡くなる直前には樹敬寺の僧が立ち会っています。墓地内の宣長夫妻と長男の春庭夫妻の墓は背中合わせに立ち、ともに国史跡に指定されています。

かつて境内には8つの塔頭がありました。塔頭とは、大寺院の敷地内にある小寺院や別坊のことをいいます。山門近くの塔頭・嶺松院では、松阪最大の月例歌会が78年間にわたって催され、やがて宣長が中心となって多くの門人たちを指導しました。嶺松院跡地前には、ここで詠んだ宣長の歌碑が建立されています。碑には、次の歌が刻まれています。

「しめやかにけふ春雨のふる言をかたらん嶺の松かげの庵 舜庵」(※舜庵は宣長の別号)

また、樹敬寺には明治・大正期に活躍した実業家・原田二郎(はらだじろう)の墓と歌碑があります。原田二郎は、大正9年(1920)に全私財を投じて財団法人原田積善会を設立し、現在でも全国の社会公益事業に貢献しています。原田家は、樹敬寺の筆頭檀家でもあります。

※本堂内は原則非公開ですが、宣長・春庭夫妻墓などは参拝できます。

日野町の道標 (ひのまちのどうひょう)



日野町の道標

江戸時代ってことは
おおよそ150年前よね？
その当時の松阪って
どんな風景だったのかな？



伊勢街道と和歌山街道の分岐点を示す道標です。江戸時代に建てられ、「右 わかやま道」「左 さんぐう道」と刻まれています。お伊勢さんを目指して参宮街道を行く旅人や、和歌山街道を通過して松阪にやって来た参勤交代の行列などで賑わったことでしょう。江戸時代から現在までのこの道の移り変わりを、道標だけが知っています。

詳細

伊勢街道(参宮街道)と和歌山街道の分岐点を示す道標です。この道標には、万葉仮名で「右 わかやま道」「左 さんぐう道」と刻まれています。しかし、建てられた年号はありません。しかし、江戸時代後期の街道図には、既にこの道標が描かれています。

伊勢街道は、四日市日永の追分から東海道と分岐して南下する道で、松阪を經由して伊勢へ向かいます。東海道(江戸～京都)は江戸幕府の道中奉行が支配する五街道(旧1級国道)の一つ、伊勢街道は江戸幕府の勘定奉行が支配する脇街道(旧2級国道)の一つです。

一方、和歌山街道はこの道標が起点となり、高見峠を越えて和歌山に向かう道です。江戸時代、紀州藩は遠く離れた伊勢国内の紀州藩領(松阪・田丸・白子領合わせて18万石を「勢州三領」という)と直結する重要な道路として、藩道(現在の県道クラス)として整備しました。この道は、紀州藩主の参勤交代や鷹狩り、勢州三領の巡見(じゅんけん)などに使われました。また、江戸時代後期になると大和(奈良)・和歌山・大阪方面からの参宮道者が往来しました。現在は、ほぼ国道166号筋に重なり、今も人々の生活道として利用されています。

新上屋跡 (しんじょうやあと)



新上屋跡



松阪の国学者・本居宣長(もとのりなが)さんと、江戸の国学者・賀茂真淵(かものまぶち)さんが、たった一度だけ対面した「松坂の一夜」の舞台となった旅宿「新上屋」の跡地です。ここから、宣長さんの本格的な古典研究がスタートしました。

詳細

新上屋は、日野町のカリヨンプラザの一角にありました。新上屋とは、松阪の国学者・本居宣長が江戸の国学者・賀茂真淵と対面した旅宿です。

宣長は、京都での遊学を終えて松阪に帰った頃、真淵の著わした『冠辞考(かんじこう)』を読みました。『冠辞考』とは、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』に使われている枕詞(まくらことば)を50音順に並べて解釈を付けた辞典です。

宣長は、随筆集『玉勝間(たまがつま)』の中で、真淵との出会いを次のように書いています。
 「冠辞考といふ物を見せたるにぞ、泉居(真淵の号)の大人の御名をも、始めてしりける(中略)見るたびに信ずる心の出来つつ、つひにいにしへぶりのこころことばの、まことに然る事をさとりぬ」
 このように宣長は『冠辞考』で初めて真淵を知り、古典研究の道へ進む決意をしたのでした。

そんな時、新上屋の近所にあった宣長行きつけの本屋「柏屋(かしわや)」から、真淵が伊勢参宮の帰途に松阪に立ち寄るという情報をつかみました。真淵が宿泊する新上屋を訪ねた宣長。真淵は宣長を招き入れ、懇切丁寧に学問の心得を説いたといいます。宝暦13年(1763)5月25日の夜、真淵と宣長が対面したのは、この一度切りです。その冬、宣長は真淵に入門し、それからは手紙で教えを受けることになりました。このとき宣長は34歳、真淵は67歳でした。この対面のときに、宣長は真淵から古事記の研究を勧められ、翌年から『古事記伝』の執筆にかかりました。そして、35年の歳月をかけて『古事記伝』全44巻を完成させました。

この対面は、のちに国学者・佐佐木信綱(ささきのぶつな)が『松坂の一夜』の一文で紹介し、国が定めた国語の教科書に掲載されて、広く知られるようになりました。

現在、新上屋跡の前の歩道には、「新上屋跡」という石柱が設置され、街路樹として宣長を象徴する山桜が植えられています。

本陣「美濃屋」跡 (ほんじん「みのや」あと)



本陣「美濃屋」跡



美濃屋小路

本陣「美濃屋」のあったところです。国学者・本居宣長(もとおりのりなが)さんが浜田藩主・松平康定(まつだいらやすさだ)さんに源氏物語を講釈した場所でした。ちょうどこの路地の角地にある食堂から隣の店舗辺りまでが本陣跡です。お殿様がどんな質問をしても、宣長さんはしっかりと答えを返したそうです。

詳細

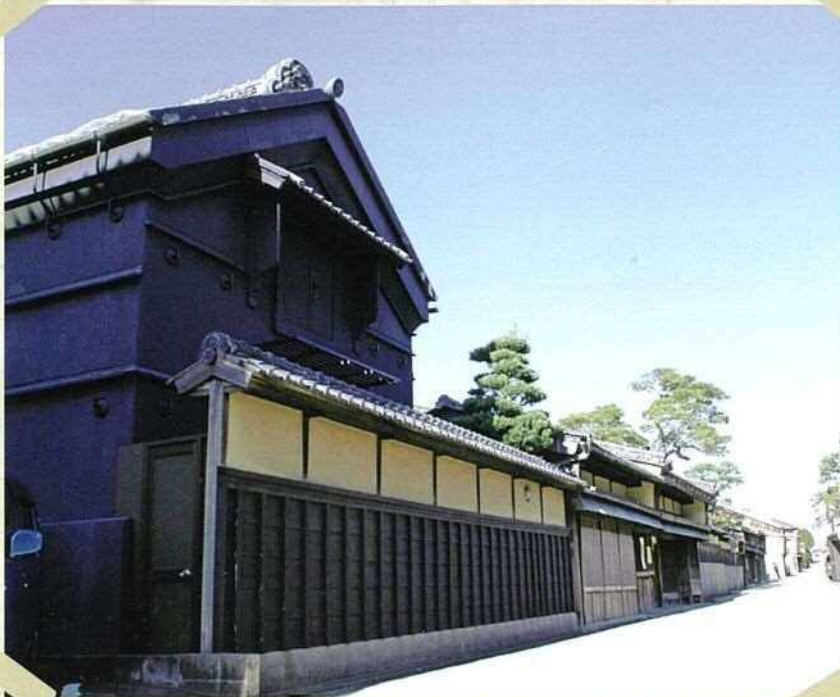
本陣とは、江戸時代の街道筋の宿場にあつて、大名や公家・幕府要人などが宿泊した公的な指定宿のことです。松阪宿の本陣は、元和8年(1622)から明治3年(1870)まで、中町にあつた美濃屋庄右衛門(みのやしやうえもん)が拝命していました。ちょうどこの路地の角地にある食堂から隣の店舗辺りまでが本陣跡です。美濃屋では、国学者・本居宣長が浜田藩(現在の島根県浜田市周辺)の藩主・松平康定に源氏物語を講釈したことで有名です。その時、宣長は松平康定より「駅鈴」を賜りました。その駅鈴のモニュメントが松阪市のシンボルとなっています。

本陣「美濃屋」跡横の狭い路地は、美濃屋の脇にあつたことから「美濃屋小路(みのやしやうじ)」と呼ばれていました。松阪の城下には、参宮街道・職人町通り・魚町通りの3幹線道路を網の目に結ぶ「小路(しょうじ)」が整備されています。これらの小路は、道筋の寺社名や商家の屋号を付けて、「常念寺小路(じやうねんじしょうじ)」・「観音小路(かんのんしょうじ)」・「亀屋小路(かめやしやうじ)」などと呼ばれています。美濃屋小路は、今も当時の道幅のままです。

ちなみに、美濃屋小路に入ると、その真ん中を横切って背割下水が流れていますが、この溝筋が魚町と中町の町境になります。

旧長谷川邸 (きゅうはせがわてい)

県指定有形文化財建造物
県指定史跡及び名勝



旧長谷川邸

魚町一丁目の「丹波屋(たんばや)」を屋号とする、木綿商・長谷川治郎兵衛(はせがわじろべえ)家の本宅です。立派なうだつ〔注〕の上がった屋根が、当時の長谷川家の繁栄振りを象徴しています。江戸時代から現在に続く、伊勢商人の繁栄の証が残る唯一の場所です。現在は当時をしのぶ外観を楽しむことができます。

〔注〕「うだつ」とは…屋根の両端を一段高くして火災の類焼を防ぐために造られた防火壁のこと。

詳細

「丹波屋」を屋号とする松阪屈指の豪商・長谷川家の旧宅です。立派なうだつの上がった屋根が、当時の長谷川家の繁栄振りを象徴しています。

長谷川家は延宝3年(1675)3代・治郎兵衛政幸(じろべえまさゆき)を創業の祖とし、やがて江戸の大伝馬町一丁目に5軒の出店を構える木綿商でした。魚町一丁目の本宅は、主人とその家族の住む居宅が中心であり、江戸店で商う松阪木綿の仕入れも行っていました。

本宅の主家中心部は、江戸時代中期の元禄期の建造といわれ、玄関口から奥に向かって通り庭が続き、その奥に土蔵が4棟並んでいます。玄関口を入ってすぐの右側3部屋を除いて、右側全体が家族の居住空間であり、左側は「江戸間」という応接間などがあります。土蔵裏には町境でもある背割下水が流れ、その奥には池を中心とした周遊式の日本庭園が広がります。殿町側にある庭園部分は、かつての紀州藩の奉行所跡であり、明治10年頃に長谷川家が買い取って庭園や離れ座敷・茶室・東屋などを造りました。

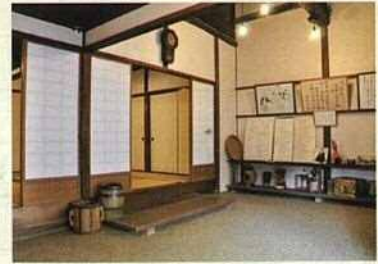
旧長谷川邸には、お屋敷のみならず、商いの様子をありありと伝える古文書もほぼ完全なかたちで保存されています。ここは、伊勢商人の繁栄の証を今に伝える貴重な場所です。

公開日 毎週日曜日、祝日(年末年始を除く) 詳細 文化課

まどみのやかた「見庵」(まどいのやかたけんあん)



まどみのやかた「見庵」



見庵(内部)



見庵(内部)

「見庵(けんあん)」は、国学者・本居宣長(もとおりのりなが)さんより6歳年下の幼友達・小泉見庵(こいずみけんあん)さんの家です。小泉家は代々格式の高い町医者であり、見庵さんの父・見卓(けんたく)さんが、宣長さんの母・かつさんに「息子さんを医者に進めたらどうか」というアドバイスをしたともいわれています。見庵さんと宣長さんは、ともに町医者として、また学問を好む朋友として親しい間柄でもありました。

詳細

本居宣長旧宅跡の向かいの「まどみのやかた 見庵」は、国学者・本居宣長より6歳年下の幼友達・小泉見庵の家です。宣長の乳母(うば)が、宣長を育てた後、小泉家に入って見庵の乳母になったともいわれますので、2人は乳兄弟ともいえます。小泉家は代々格式の高い町医者であり、見庵の父・見卓が、宣長の母・かつに「息子さんを医者に進めたらどうか」というアドバイスをしたともいわれています。

見庵と宣長は、ともに町医者として、また学問を好む朋友として親しい間柄でもありました。見庵は、京都で医業修行中の宣長を激励に訪れ、また宣長が吉野・飛鳥地方を旅した時に見庵も同行しています。この旅記録が宣長の著した『菅笠日記』です。宣長が43歳、見庵が37歳の時でした。

宣長の時代には、松坂城下に35人の医者がいましたが、その中で最も格式が高かったのは、鍛冶町(現在は日野町)の紀州藩代々御目見医師(おめみえいし)の鹿嶋元泰(かしまげんたい)、その次が御目見医師の小泉見卓でした。ちなみに、「本居春庵(宣長の医者としての号)」は、35人中5番目にランク付けされ、魚町には小泉見卓・本居春庵・小泉原一・本田広悦・森玄節の5人の医者がいました。

宣長は鈴の音を愛好していたことで知られていますが、地元ではそれとは異なるエピソードも伝わっています。当時、宣長の家の隣に桶屋があったらしいのですが、桶屋のたてる音が宣長の勉強の邪魔をすることがあったそうです。そうしたときに鈴を鳴らして桶屋に「静かにしてほしい」と伝えていたといわれています。鈴は桶屋への合図に使われていたのかもしれないですね。このエピソードが伝わり、地元の集会で騒がしいときに鈴を鳴らすジェスチャーをして静かにさせるそうです。

※内部は、原則非公開です。

本居宣長宅跡 (もとおりのりながたくあと)



本居宣長宅跡

本居宣長宅跡は、国の特別史跡です。日本の学問史上にその名を残す国学者・本居宣長(もとおりのりなが)さんが、12歳から72歳まで暮らした住まい跡です。旧宅(鈴屋)は松坂城跡に移されましたが、長男の春庭(はるにわ)さんが住んでいた家と土蔵、宣長さんが愛した庭の松は現在も残されています。この地から、国学の礎が築かれることになったのです。



春庭宅

詳細

国学者・本居宣長が、12歳から72歳まで暮らした住まい跡です。宣長の旧宅は永久保存するため、明治42年(1909)に松坂城跡へ移築されました。移築後も旧宅の礎石はそのまま残され、宣長の長男、春庭が住んでいた家と土蔵や宣長が愛した庭の松も残されています。

宣長の生まれた小津家は、もともと「小津屋」という屋号を名乗る、江戸店持ちの木綿商でした。ちなみに本町の豪商・小津清左衛門長弘は、宣長の曾祖父・小津三郎右衛門から資金を借りて商いを始め、その際には屋号も与えられました。

宣長が姓を小津から「本居」に替えたのは、彼が商人になることをやめたためです。母の勧めで23歳を過ぎてから医業を学びに京都へ向かった宣長は、その折に「本居に復す」と記しています。小津を名乗る以前の宣長の先祖は、「本居」姓を名乗る武士であったため、心機一転、先祖の姓に戻したそうです。

松坂城跡に移築された旧宅「鈴屋(すずのや)」は、本居宣長記念館により保存されており、こちらも国特別史跡に指定されています。ちなみに「鈴屋」とは、旧宅の2階にある書斎の呼び名です。この書斎は、宣長の名声があがりはじめた53歳の時、物置を改造して造られました。書斎の床近くに36個の小鈴を連ねた「柱掛鈴(はしらかけすず)」をかけたことから、この名が付けられました。宣長の多くの著作は、この部屋で書かれました。

松坂城のお堀(神道川)

(まつさかじょうのおほり、じんどうがわ)



松坂城のお堀

松坂城を取り囲むお堀の総延長は2.1キロメートルといわれており、幅は広いところでは30メートルもあったそうです。現在もこの地点を流れている神道川(じんどうがわ)はお堀の外側のなごりです。

詳細

現在もこの地点を流れている神道川は堀の外側のなごりです。当時の堀自体は平均20メートル前後の幅があり、広いところでは30メートルもありました。また、深さは最深で3メートルもありました。お城に通じる門は「四ツ足御門(よつあしごもん)※別称“大手門(おおてもん)”」、「竹御門(たけごもん)※別称“搦手門(からめてもん)”」、「五曲口御門(ごまがりぐちごもん)」と、同心町へ通じる門(名称不詳)の4箇所ありました。名称の伝わらない門は「不開の門(あかずのもん)」といわれる不浄門であったようです。



松坂城に
忍び込もうとしても
30メートルのお堀は
そう簡単には
渡れなかつただろうね。

